（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	清重　英矩
論文題目	風景構成法における彩色過程の心理療法的意義に関する研究		

（論文内容の要旨）

本論文は，中井久夫が 1970 年に発表した描画法である風景構成法（Landscape Montage Technique; LMT）に関し，その「素描過程」に比べて未検討面の多い「彩色過程」をとりあげ，その心理療法的意義を理論的・実証的に検討するものである。

序章では，現代の心理療法をめぐる課題に関する先行研究を基に，現代社会では効率化や実用性が重視される傾向があるものの，心理療法が効率的で実用的であろうとすることは本末転倒であるという知見と，LMT が社会の価値観や理解では捉えにくい心的営みへの接近法として開発された描画法である事実を踏まえ，彩色過程の心的体験に関する知見がそれに資するという問題意識を明示している。

第 1 章では，LMT に関する国内外の研究史を踏まえ，従来の彩色過程の位置づけおよび研究に伴う困難，彩色による「情動づけ」と「構成」の機能に関する先行知見について指摘している。第 2 章では，描画法の心理査定的・心理療法的な両側面を再検討し，特に後者について Jung の分析心理学の視点から，意識的自我を超える「第三のもの」としてのイメージと，描画法の基本要素として整理した《かく》・《みる》・《かかわる》との関連を踏まえ，LMT の心理療法的意義について考察している。第 3 章では，色彩体験に関する先行知見から，色を用いた心理臨床技法の 3 特徴（語る・選ぶ・塗る）を整理し，色を《かく》こととイメージの機能との関連について考察している。

以上の研究史的・理論的考察を踏まえ，第 4 章から第 7 章では，大学生を対象とした LMT の実施および質問紙法と半構造化面接法による調査データをもとにした各種分析を通じて，彩色過程の心的体験について多角的に検討している。

第 4 章では，彩色過程体験の質的分析により 5 分類と下位分類を抽出し，彩色することが作品との循環的体験の中での情緒的内容の賦活と内的対話を促進することや，色によるイメージの展開や未彩色部分における体験の重要性について考察している。第 5 章では，「余白」「塗り残し」体験の質的分析から，未彩色部分が描き手の心的課題を示唆する他，主体の生成や回復に伴う苦悩や曖昧さを抱える萌芽的意味を担う可能性について考察している。第 6 章では，描き手－作品－見守り手の三者関係を視野に入れ，言葉を用いる素描過程から用いない彩色過程への移行に伴う三者関係の構造的変化を検討し，彩色過程における描き手と見守り手の非言語水準双方の内的体験過程と両者間の相互的交流について考察している。第 7 章では，描き手の対作品体験と対見守り手体験の両面と，素描過程と彩色過程の 2 過程との関係について，調査データから 4 群（後退群・持続群・ゆらぎ群・無変化群）を抽出している。また，4 群および素描過程・彩色過程の 2 時点と，作品体験の SD 法評定値に基づく 3 因子（情動性・調和性・分化性）との関係についての分散分析の結果，全ての群で素描過程よりも彩色過程において 3 因子全てが高まることが示された他，群間の相違点の一端も示されている。さらに 4 群それぞれの体験の特徴を代表的事例を基に考察している。

終章では，彩色による循環的体験から心的内容が活性化されること，色による情緒的イメージが賦活され風景構成に影響を与えること，未彩色部分で描き手の主体の潜在性やその萌芽を抱えることが意識的主体に心的次元での変容をもたらす契機となることが，彩色過程の心理療法的意義と結論づけ，見守り手との心的関係のあり方によって強調される心理療法的側面が異なることを考察すると共に，本研究の課題と今後の展望の提示によって論を締め括っている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は，心理臨床現場で広く用いられる描画法の中でも心理療法的意義が高いとされる「風景構成法（Landscape Montage Technique; LMT）」（中井, 1970）の「彩色過程」の非言語的営みにおける心理療法的意義について検討したものである。

LMT は，見守り手が用紙の四辺に沿ってペンで枠をつけ，10 個の風景要素（アイテム）を一つずつ言葉で唱えるごとに，描き手がそれをイメージして枠内に描き入れ，風景として構成する「素描過程」と，それにクレヨン等で色をつける「彩色過程」からなる描画法である。第 1 章で筆者が国内外の先行研究のレビューを通じて述べる通り，素描過程に関する研究は数多く，風景構成の諸相にパーソナリティや心的体験の質的側面を読み取る視点等, クライエント理解に資する知見が重ねられてきた一方で, 彩色過程に関する理論的・実証的研究はごく少数である。

本論文はこの彩色過程の心理学的意義について理論的・実証的に検討するものであり, その取り組みは, クライエントの心理的問題に LMT を通した理解に資するに留まらず，その心理療法的機序の一端を明らかにし，クライエントの非言語的な内的対話や，クライエントとセラピストの間の非言語的やりとりに関する知見を導こうとする点で極めて意欲的である。描画法とその心理療法的営みにおける，非言語的営みという，目に見えにくい本質的側面を描き出そうとする点は，臨床心理学的に大きな意義を持つと評価しうる。また，描き手に生じる自他との非言語的やりとりに関する知見は，教育現場や生涯教育等においても幅広く活かされ得るものと考えられる。

特に評価に値する点としては，具体的には，下記の 3 点を挙げることができる。

第一に, 第 1 章において, 国内外の LMT に関する先行研究を幅広く収集し精査することにより，彩色過程に関する知見の現在地と問題点を明確化するとともに，第 3 章において，色に関する臨床心理学的アプローチの理論的検討によって，①LMT の彩色過程が，色を通じた個別的・普遍的体験との交流に加え，それを《かく》（塗る）という身体的・能動的営みが伴うことで，意識的自我を超えた心的体験に開かれていく働きが賦活されうること，②その過程で見守り手をどう体験するかにより個人差が生じる可能性があることを導出していることが高く評価できる。

第二に，大学生 45 名を対象に LMT を実施し，その心的体験に関する質問紙法および半構造化面接法による調査を通じて多くの質的・数量的データを得，その綿密な精査により従来の知見を裏付けるとともに, 新たな知見を複数提示し得ている点である。

具体的には，第 4 章において，描き手の彩色過程体験を精査し,「Ⅰ：彩色過程における作品に対する印象」「Ⅱ：彩色行為に対する描き手自身の感想や態度」「Ⅲ：彩色における色の選択基準」「Ⅳ：彩色の工夫および関わりの体験」「Ⅴ：描画状況に関する体験」の 5 つの大分類と下位分類を抽出し，従来の心理臨床知見や実証的知見を支持する結果を得ると共に，従来未指摘の心的動きをあぶり出した点が出色である。

特に,「特定のアイテムや領域の彩色表現に対する評価」は「否定的」に体験する者が多いにも関わらず,「彩色過程での感情体験」は「肯定的」である者が大多数であるという知見は，素描過程だけでなく彩色過程においても，個人の心的課題性があぶり出され，それに直面化させられる体験となりうる一方で，それらの営みが全体として肯定感に包まれうる, という心理療法的仕組みを LMT が備えている可能性を示唆する知見としてたいへん興味深い。さらに第 5 章では，余白や塗り残し等，彩色しないことをめぐる心的体験の分類抽出により，従来の知見よりもさらに細やかな理解や個人差の理解につながる視点を提示している。

第三は，第 7 章において，描き手が自らの風景描画との間と見守り手との間の 2 つの面をいかに体験しているのかに関する 4 類型（群）を抽出し，この 4 群と素描過程・彩色過程の 2 時点の 2 要因を独立変数，描画体験の SD 法評定値に基づく 3 因子（情

動性・調和性・分化性）の得点を従属変数とする分散分析結果から，その相違点と共通点に関わる知見を提示し得た点である。具体的には，①見守り手への意識が徐々に背景に退く群（後退群），②一貫して見守り手を意識する群（持続群），③見守り手への意識が揺れ動く群（ゆらぎ群），④一貫して見守り手を意識しない群（無変化群）の4 群が抽出され，持続群がゆらぎ群よりも主観的体験における分化性が高い等の群間差の一端が示された一方，とりわけ，いずれの群においても，素描過程よりも彩色過程において，情動性・調和性・分化性の全てが高まることが示された点は，彩色過程の心理療法的意義に関する筆者の理論的主張を裏付ける重要な知見である。

以上に指摘する通り，本論文は，LMT における彩色過程の心的体験過程に関する理論的・実証的検討により，学問的・実践的に意義ある知見を提示するものと評価しうる。しかし，問題点がないわけではない。口頭試問では，第 7 章にて提示された描画体験 4 群の名称に難があり，群の性質をより的確に反映させることが望まれる点，心理療法的意義をより明確に示すためには調査事例だけでなく心理臨床事例を基にした検討が望まれる点，LMT の彩色過程の独自性を検証するためには，彩色を伴う他の描画法データとの比較を通じた実証的検討も望まれる点等の指摘があり，議論がなされた。しかしながら，これらの指摘は本論文の価値をいささかも損なうものではなく，むしろ臨床心理学領域の研究者および心理臨床家としての著者の今後のさらなる発展のための課題とされるべきものである。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，令和 5 年 3 月 14 日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。

なお，本論文は，京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し，公表に際しては，（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。